

民研だより

民主教育研究所
Research Institute of Democracy and Education

No. 126
2015.12.7

CONTENTS

特集 追悼・茂木 俊彦さん

- ◆ 大学院生にして「助教授」風 …………… 三上 昭彦 1
- ◆ 茂木俊彦先生のこと …………… 越野 和之 3
- ◆ 子どもの権利の視点をもって学ぶこと…………… 中村 尚子 5
- ◆ 心理的なものと社会的なものとの結合の理念を……… 金田 利子 6
- ◆ 民研日誌と寄贈図書…………… 7



民主教育研究所代表運営委員の茂木俊彦さんが9月25日16時45分にご逝去されました。

こころより哀悼の意を捧げます。

茂木俊彦さんと大学入学から大学院、そして卒業後も共に民主教育研究所の運営委員として歩んでこられた三上明彦さん、10年間にわたって茂木俊彦さんのもとの学び、その後は全障研の活動など一緒に研究・運動されてこられた越野和之さん、民主教育研究所「特別支援教育と子ども・学校」研究委員会で一緒に研究されてきた中村尚子さん、心理科学研究会において共に発達研究・保育の理論構築と研究・運動をしてこられた金田利子さんの4人の方から追悼の辞を頂きました。

大学院生にして「助教授」風

三上 昭彦（民研顧問）

茂木君とは、生年（1942年）、そして大学入学・大学院進学の年度も同じであり、東大教育学部・同大学院の時代から始まった付き合いはその後半世紀に及んだことになる。もっとも同じ教育系とはいえ、彼は教育心理学・障害児教育、僕は教育行政学・教育政策というように専攻分野はまったく違っていったことから、大学院を離れた後は研究や活動の場を共にすることはほとんどなかった。親しく付き合ったのは学部・大

学院時代の最初の10年間と、民主教育研究所の運営委員などを共にした最後の10数年ということになる。

駒場から本郷に進学したころであったろうか。彼が不就学児や障害児の教育や人権の問題に強い関心をよせていることを知って、なんとなく親近感を抱くようになった。僕は大学入学とともに部落問題研究会に入り、部落差別や同和教育問題に関心をもち、都内に残存していた同和地区で地道な子ど

も会活動などに取り組んでいた。そんなことから「社会的弱者の視点」や「被差別の視点」をそれなりに共有していたからであろう。また、当時盛んであった自治会や院生協議会などの活動や大学民主化運動、ベトナム反戦や民主主義諸運動などお互いにコミットするなかで信頼関係が深まっていたように思う。

とりわけ60年代末の東大闘争（紛争）では、私たち院生もその激烈な渦中に置かれることになった。それは医学部学生に対する同教授会の不当処分撤回運動に端を発したものであったが、その後、既存の大学や学問そのもののあり方、大学の自治のありかたを糾すものとして全学化・激烈化し、さらに全国化していった。私たちの教育系院生協議会は、「全学バリスト」「東大解体」を標榜する全共闘路線には与しなかったが、院生間でも激しい論争と対立、不幸な不信と亀裂が生じ、その後も長く尾をひくことになった。

しかし他方でそれは、狭い学科や専攻の壁を突き破り、院生間の交流や議論を拡げ深めていくものでもあった。当時の教育系大学院の博士課程には、すでに「助教授」然とした風貌と雰囲気をもった者がいた。その一人が他ならぬ茂木君であった。彼の「眼力」はなかなか鋭く辛辣な面もあったが、その言動が尊大であったということではもちろんない。落ち着いた目配りのあるその言動は私たち多くの者に信頼感を与えるのであった。

茂木君は、もたもたしていた僕らより一足先に教育心理学科の助手を務め、その後、広島大学に赴任して行った。5年ほどの広島大学時代を経て再び上京して立正大学、都立大学に勤務することになり、彼の教育心理学、障害児心理学の研究・教育活



若き茂木俊彦さん。1967年（24歳）メーデー会場にて

動、全障研、民研をはじめとする諸活動はより全面的に開花したように思われる。都立大学では人文学部長二期務め、引続いて「最後の総長」という大役を担い、石原都政の都立大学「大再編」政策と厳しく対峙することになった。察するところ大学行政を担ったその数年間は、凄まじい心身のストレスを受けることになり、無念の「早逝」への遠因となったのではないかと想うのである。

戦後70年、文字通り同時代を生きてきた学徒の一人から見て、茂木君は自らの専門分野の研究・教育はもとより、ほんとうに重要な多くの仕事を十分に誠実に果たしてきたのだとつくづく思う。それでもなお、「茂木君！ 逝くのはまだ早いのではないか！」、と叫びたくなるのである（2015.11.20）。

茂木俊彦先生のこと

越野 和之（奈良教育大学・全障研副委員長）

茂木俊彦先生の訃報に接し、かけがえない恩師を失った悲しみと、ことばでは到底言い尽くせないような喪失感の一方で、少なくとも私は、そのように感じ・あるいは言うてはならないのではないかという感覚も強く持った。私ほどたくさんものを茂木先生からいただいた人間は他にいないのではないかと感じているからである。

私は1983年4月に東京都立大学人文学部に入学し、1993年3月に大学院博士課程を退学するまで、10年間にわたって茂木先生の下で学んだ。学部の卒業論文および5年間に渡る大学院での研究は、主として茂木先生にご指導いただいたし、茂木先生のゼミには1984年度（学部2年生）から1992年度（博士課程3年生）まで9年間にわたって毎年参加した。大学院に進学した1988年からは、全国障害者問題研究会（全障研）の全国事務局にも誘っていただき、大学院生であった5年の間、毎週水曜夜の事務局会議や夏の全国大会、各種の研究会などで茂木先生と同席させていただくことができた。

1993年には職を得て東京から奈良へと居を移すことになったが、全障研の毎年の大会や春の研究集会などでは、引き続き先生にお目にかかることができたし、数年してからは全障研の常任委員会に、また後には『障害者問題研究』誌の編集委員会にも参加するようになったので、全障研の活動だけでも年間10回近く先生とお会いした。

毎回親しくお話しする機会があったわけではないが、会議のたびに先生のご発言には多くのことを学ばせていただいたし、何かの折には必ず声をかけてもいただいた。さらに、2000年度からは全教・日高教主催の教育研究全国集会（現「教育のつどい」）でも、障害児教育分科会の共同研究者として同席させていただくことになり、集会の数日間や打ち合わせの会議などで先生のお話を伺ったり、時にはちょっとした相談に乗っていただくこともあった。昨年度までの十数回の集会の中で、私は何回か分科会の基調提案をする機会をいただいたが、そうした折には提案の後、必ずいくつかのコメントをいただいた。すぐにお返事できたこともあれば、その場では明瞭な答えができず、長く考える「宿題」となっていることもある。

そのほか、茂木先生が編集を担当された本に執筆させていただいたり、先生のご紹介で翻訳の一部を分担させていただいたこともある。大学に入学した18歳の頃から、50歳になる今日まで、30年以上にわたって、その時々で、とても大切な、他からは決して得られないことを教えていただいた。もちろん、先生の多くの著作からも、今日に至るまで、幾多の発見や学びを与えていただいている。私には、数え切れないほどたくさんものを先生からいただき続けてきたという実感があり、それが冒頭に記したような感慨を私に与えたのだと思

う。

その一方で、記憶を改めて辿ってみると、茂木先生と差し向かいでゆっくりと会話を交わした場面というのは、卒論・修論の指導をそれぞれ1～2回ずつ喫茶店でしていただいたくらいで、存外少ないような気がする。私が都立大学に在学した時期、茂木先生が大学に来られるのはご担当の授業や会議のある週3日ほどで（本当は他にも来ておられたのかも知れないが、学生はそう思っていた）、他の日は各地の養護学校などのご講演や共同研究、あるいは保育所における障害児保育の巡回指導などで飛び回っておられた、という印象がある。全障研の全国事務局のお手伝いをするようになってからは、新大久保から池袋までの10分足らずの山手線の中が、先生とお話しする貴重な時間であった。

車中での話題はたいていは本の話だったように記憶している。「越野くん、あの本は読みましたか」とか、「今、こんな本を読んでいるんだけどね…」というお話を伺い、先生のご関心の広大さと読書量に舌を巻くことが多かった。私にとって茂木先生は、机を隔てて向き合ってご指導いただくという以上に、全障研などの活動と一緒にとりくみながら、隣り合ってお話を伺ったり、先生ご自身が活動にとりくむ姿から学ばせていただく、という存在であった。とりわけ先生が、教育実践や障害者運動に責任を持つ現場の先生方や、障害のある子どもたちの父母・ご家族と接する時の向き合い方—それぞれの実践の努力に最大限の敬意を払い、そこで生み出された事実から真実を汲みとろうとする姿勢—は、私にとって、常にめざすべき大切な指標になっていた

る。

先生にかけていただいたいくつものことばの中で、どれか一つをあげるとすれば何だろう。ずいぶん考えてみたのだが、「やりたいことではなく、やるべきことをやるんだよ」という一言が、私にとって最も大切なことばになっているように思う。実はこのことばは、ある年の全障研の春の集会で、一つの分科会の司会者が急に欠席し、ピンチヒッターをどうするか、という場面で伺ったことばである。結局私に役割が回ってきたのだが、別の分科会に参加するつもりでいた私はいくらかの抵抗をした。そんな場面で先生は、半ば冗談のように、上のことばを仰ったのである。その時はやや不服でもあったのだが、その後私は、折々に先生のこのことばを思い出すことになる。茂木先生のこのことばが、私にとって重みを持つのは、他でもない先生ご自身が、このことを自らに最も厳しく求めておられたと感じるからだと思う。「やりたいことよりやるべきことを」。私にとってこのことばは、「茂木先生ならこんな時どうされるだろう」と考えてみることと同義に近い。

茂木先生にご指導いただいた教育心理学とは異なる領域を自身の専門とすることになってしまった私だが、先生が生涯をかけてとりくまれた障害者の権利保障運動、民主的な教育研究運動のさらなる発展に、私なりのアプローチで力を尽くすことで、先生にいただいた教えとご恩に報いていきたいと決意している。

茂木俊彦先生、長年にわたりご指導いただき、本当にありがとうございました。

子どもの権利の視点をもって学ぶこと

中村 尚子 (「特別支援教育と子ども・学校」研究委員会委員長)

「忙しいでしょう。毎日、あれこれあるねえ」。研究委員会が始まる前のちょっとした時間、茂木さんといつもそんな会話をしていたことを思い出します。次回の研究委員会の開催を決めるとき、茂木さんのちょっと大きめの手帳は、いつも予定がいっぱいでした。でも、茂木さんはどんなに多忙でも研究委員会に出席する努力をしました。代表の職にあっても、ただ「顔を出す」だけでなく、たとえわずかの時間でも「参加」して議論を一步、二歩とすすめる発言をしてくれました。こうした茂木さんの姿勢は、なによりも責任をもって物事にあたるといふ茂木さんの生き方に由来するのでしょうか、障害のある子どものことを自らの研究の根っこに位置づけ、本研究委員会での議論の場を大切にしてくれていたからだと私は思っています。以下、研究委員会の活動の中で茂木さんから学んだことの一部を書き記します。

何よりも第一は、教育全体、社会全体の動向の中で障害児、あるいは特別な教育的ニーズをもつ子どもの教育の課題を論じ、問題解決の方向性を見出すという視点を重視するということです。本研究委員会がスタートしたのが民研のなかでは比較的遅いことに象徴されるように、子どもと学校にかかわる研究テーマが多岐にわたる中で、障害のある子どもの問題は声を大きくしなければ注目されない場合もあります。しかし、「障害児教育」というテーマを掲げたとたん、ここにかかわる人が限られてきて、まさに「特別な教育」になってしまう

という傾向もみられます。こうした現実をたいして、民研という研究と教育の統一をめざす研究団体だからこそできる意義ある研究活動をめざして本研究委員会が発出し、その中心を担ったのが茂木さんだったといえます。

実際、茂木さんは発足当初から本研究委員会での議論を民研全体の中に位置づけようとしてきました。初期の成果は、『民主教育研究所年報』第9号(2008年度)の「特別支援教育と子どもの学習権・発達権」として特集されています。その巻頭で、当時、研究委員会委員長だった茂木さんは、「問題へのアプローチの相対的重点」を通常教育に置くこと、すなわち通常教育の場の実態把握や分析に焦点を当てて研究をすすめることを本研究委員会の特徴としていくと述べています。

研究委員会では、率先して民研全体で議論していることを報告してくれました。2014年7月の研究委員会では(このときが出席された最後の研究会だったと思います)、「PISAの課題とインクルーシブ教育」と題して、PISA調査中止を求める世界の教育学者の公開書簡について報告。PISA調査が、結果として新自由主義的な教育政策の推進を後押しすることになっているだけでなく、教育の質的側面で問題を抱えていることを学びました。

もう一つ、茂木さんとともに私たちの研究委員会の姿勢として貫いてきたことは、現実から目をそらさず、実態に学ぶということです。ゲスト講師として保護者や通常

学級の担任を招く、教職員組合が把握している全国的な情勢を聞くといったことを重ねることで、文科省や東京都などの特別支援教育政策のもとで生起している諸問題の深さを認識してきたといってもよいでしょう。こうした現場からの実態報告をテーマにしてきた研究会のあと、茂木さんは「ああ、きょうは勉強になったなあ」という言葉をよく口にしていました。

茂木さん自身も、講演先で知り得た情報を委員会で伝えてくれたので、東京中心になりがちな研究委員会の視野がぐんと広がりました。

著書のなかでもたびたびふれているように、茂木さんが障害のある子どもの研究に本格的にとりくむことになった契機の一つは、東京都の不就学児実態調査活動にあります。これも病をえる直前、東京での大き

な講演としては最後になったと思われる茂木さんの話の主題は、「東京の全員就学から40年、これからの障害児教育を考える」でした（2014年6月29日）。テーマに合わせたからではありますが、文京区の実態調査の一コマについて熱を込めて語り、あわせて院生時代、教育相談で保護者に「就学猶予」をすすめた経験について、「長いあいだ負い目になっています」と語りました。そのことばに、茂木さんのその後のエネルギーの根源を見たのは私だけではなかったと思います。

いま研究委員会は、特別支援学校の過大・過密を主要なテーマに取り組んでいます。視野を狭めることなく、これまでの歩みに学びながら、子どもの権利というたしかな視点をもって研究と実践をすすめていこうと、決意をあらたにしています。

心理的なものと社会的なものとの結合の理念を

金田 利子（心理科学研究会）

本年9月4日の午後4時ごろ逗子の病院の窓からよく緑の見える病室で茂木さんに出会った。これが最後の対面だった。想像していたよりは顔色がよく肌につやもあった。奥様が「この人誰かわかる？」と問われると「もちろん」というような顔で頷かれた。帰り際には茂木さんの方から握手を求めてこられた。これは、お見舞いに見えたすべての人に託された茂木さんからの「希望の花束」なのではないかと受け止め、私は、私とのその握手の意味を考え、茂木さんへの感謝と彼からの希望を受け継ぎ次代につなぐ架け橋にならなければと思った。

茂木さん（私よりやや若いけれど学兄、ではあるがほぼ同時代人の友人として、「さん」にさせていただく）とは、心理科学研究会と全国障害者問題研究会の初期の頃からの会員同士で、特に障害児保育については茂木さんのリードで一緒に創造してきた仲間であった。忘れられないのは茂木さんからの声掛けで『障害児保育の理論と実践上巻』（茂木編著、都政人協会、1976）の第3章「障害幼児の発達と保育の原理」（pp.179-253）の1章分を一人で書かせていただいたことである。今から40年前原稿用紙200枚近いものを書いたのは修論以来この時がはじめてであった。一方茂木さ

んは 30 歳を少しすぎたその時に上下 2 巻の大著の編著の役割を担っていたことを思うとそのすごさに驚かされる。

こうした共同の仕事は他にも幾つかあるが、一番最近は大月書店の『保育小辞典』の監修をご一緒にしたことである。ここでは、判断力の速さ、切る必要のあるものごとには即切っていくところに、優柔不断の逆の能力を垣間見て、民主的管理者としての厳しさの一面を実感させられた。

さて、心理科学研究会では、心理的なものをそれだけで追究するとき、人々の切に必要とするものから離れ、真の科学とはならないことから、心理的なものと社会的なもの、実践的なものと科学的なものなどの統一が常に求められてきたが、茂木さんはその理念を自らの研究者・教育者・大学運営者・生活者としての人格に刻み込み、会の理念を地で具現化し、20 世紀後半から

21 世紀前半の障害児保育・教育の理論構築と研究・運動に結実してきた人、さらに今日、歴史の曲がり角においても一層深く究めようとし続けてきた人だと言える。

書物の中にはないが時々漏らされた言葉に彼の発達保障論への秘めた構想が読み取れた。あくまで筆者の私見で的確な表現とは言えないかもしれないが、それは、「田中昌人氏の発達保障論を高く評価しつつも、発達としての変化の仕組は、拡張から飛躍という一つの線の中にあるように思われるが、ピアジェの同化と調節との違いに理論的切り込みが必要では」と。

厳しい表情の中に温かい笑顔がみられる茂木さんからの人類の持続発展への限りない「希望」を老若男女、多くの人たちに伝えたい。その中で茂木さんにも永遠に生きつづけていただきたい。

茂木俊彦さんの略歴

1942 年	群馬県前橋市に 10 月 13 日生まれる
1961 年 3 月	群馬県立前橋高等学校卒業
1966 年 3 月	東京大学教育学部教育心理学科卒業
1970 年 10 月	東京大学大学院教育学研究科博士課程教育心理学専門課程中途退学
1970 年 11 月	東京大学教育学部助手（教育心理学科）
1972 年	文京区の不就学実態調査にとりくむ
1973 年 8 月	広島大学教育学部東雲分校講師、76 年助教授
1978 年 4 月	立正大学文学部助教授
1979 年	全国障害者問題研究会副委員長（～ 2003 年）、89 年全国委員長
1981 年 10 月	東京都立大学人文学部助教授（教育学専攻）、91 年教授
1992 年～	民主教育研究所運営委員
1992 年	ニューヨーク市立大学にて在外研究（～ 93 年）
1999 年 4 月	東京都立大学人文学部長（～ 2003 年 3 月）
2003 年 4 月	第 11 代東京都立大学総長（～ 2005 年 3 月）
2005 年	桜美林大学教授、特任教授（～ 2015 年 3 月）
2006 年～	東京の教育を考える校長・教頭（副校長）経験者の会代表
2010 年～	民主教育研究所代表運営委員
2015 年 9 月 25 日（16 時 24 分）	逝去

民研日誌 9～11月

- 9/3 『人間と教育』編集委員会
第11回四役・事務局会議、子ども全国センター幹事会
- 9/5 子ども研究委員会、『民研だより』No.125号発行
- 9/7 「ジェンダーと教育」研究委員会
茂木俊彦さんお見舞い
- 9/8 戦争法案廃案！安倍政権退陣！新宿駅西口大宣伝
- 9/9 避難訓練
- 9/10 『人間と教育』第87号発行
- 9/12 第10回運営委員会
フォーラム「『21世紀型学力』と新自由主義教育改革」
- 9/27 高校教育研究委員会
- 9/28 「茂木俊彦さんのお別れの会」呼びかけ団体会議
- 9/29 教育行財政研究委員会
「地域と環境」教育研究委員会
- 10/1 子ども全国センター幹事会
- 10/2 中等教育研究委員会
- 10/3 つどい実行委員会
教文部長・分科会責任者会議
臨時第11回運営委員会
『人間と教育』SEALDs インタビュー
- 10/5 「茂木俊彦さんのお別れの会」呼びかけ団体会議
- 10/8 教育子育て九条の会第3回実行委員会
全国町村会館打ち合わせ
- 10/10 東京制度研総会
- 10/16 『人間と教育』編集委員会
会計監査
- 10/23 第12回四役・事務局会議
- 10/25 教育課程研究委員会
- 10/26 「ジェンダーと教育」研究委員会
- 10/27 教育行財政研究委員会
- 10/30 中等教育研究委員会
- 10/31 子ども研究委員会
「特別支援教育と子ども・学校」研究委員会
- 11/3 「茂木俊彦さんのお別れの会」呼びかけ団体会議
- 11/5 茂木俊彦さん宅訪問
- 11/6 『人間と教育』編集委員会
- 11/7 参加と共同の学校づくり・教育課程づくり交流会
(講演 梅原利夫)
- 11/8 参加と共同の学校づくり・教育課程づくり交流会
- 11/9 「環境と地域」教育研究委員会
- 11/13 『人間と教育』校正
- 11/14 第12回運営委員会
フォーラム「大人社会の危機の中で生きる子どもたち」
「特別支援教育と子ども・学校」研究委員会
- 11/15 第61回子ども守る文化会議
- 11/16 「ジェンダーと教育」研究委員会
- 11/17 教育行財政研究委員会
- 11/18 子ども全国センター幹事会
子ども全国センター文科省要請
- 11/19 全国町村会館との打ち合わせ
- 11/20 教育子育て九条の会第4回実行委員会
『人間と教育』出張校正
- 11/24 「茂木俊彦さんのお別れの会」呼びかけ団体会議
- 11/26 「教育のつどい」実行委員会
- 11/29 茂木俊彦さんのお別れの会

寄贈図書資料 9～11月

- 『村山士郎教育論集Ⅴ 教師の生き方と教育実践の創造』村山士郎・本の泉社
- 『平和と平等を追い求めて』宮本英子・ドメス出版
- 『18歳からの選挙』全国民主主義教育研究会編・同時代社
- 『おじいさんおばあさんの子どもの頃日本は戦争した』中村攻 宮崎喜代美 石澤憲三編 而立書房
- 『<在朝日本人二世>のアイデンティティ形成』高吉嬉・桐書房
- 『村山士郎教育論集Ⅵ 日本の学校づくりとロシア学校史研究』村山士郎・本の泉社
- 『教科書レポート』『教科書レポート』編集委員会・出版労連
- 『大学教育と「絵本の世界」(中巻)』前島康男 創風社
- 『地図から「よのなか」を見てみよう!全5巻』加藤哲三・小林みゆき監修・旬報社
- 『言語の自然な学び方』セレスタン・フレネ著里見実訳・太郎次郎社

民研だより No.126 2015.12.7

発行 民主教育研究所 発行責任者 梅原利夫

〒102-0084 東京都千代田区二番町12-1 全国教育文化会館5F

TEL 03-3261-1931 Fax 03-3261-1933

Email office@min-ken.org H.P. http://www.min-ken.org